様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１１７４８

研究課題名（和文）その人らしさやおだやかさを生かした認知症ケアの探求

研究課題名（英文）Research for dementia care that takes advantage of their personality and Well-Being

研究代表者
辻村　弘美（Tsujimura, Hiromi）

群馬大学・大学院保健学研究科・講師

研究者番号：７０３７５５４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は筆者らが開発した18項目版認知症高齢者おだやかスケール（Dementia Elderly ODAYAKA Scale: DEOS、以下DEOS）の特徴と使用可能性を検討することである。高齢者ケア施設や訪問看護においてスタッフが対象者にアロママッサージなどのケア介入や本人の強みを生かした役割や作業を提供してケア開始時、実施1か月後、実施2か月後の3時点で評価した。対象者本人の好みや強みを生かした役割を提供することに関しては、DEOSの得点上昇を確認した。対象者のその人らしさを生かした介入をすることが社会的交流や笑顔の表出、Well-Beingにつながっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
DEOSは認知症高齢者の日常生活を評価する客観的評価スケールであり、本研究ではその特徴を理解してどのような使用方法が有意義なのかを検討した。本研究結果において、DEOSは認知症高齢者のその人らしさや本人の強みや好みといったポジティブなところを活かしながらケアすることでDEOSの得点が上昇している。これらのことは、本人のWell-Being（良い状態）を高めるだけでなく家族や介護者の介護負担の軽減の一助となることが期待できる。今後は、臨床や在宅でのDEOSの具体的活用方法について広く紹介していく予定である。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to apply the 18-item Dementia Elderly ODAYAKA Scale(DEOS) for dementia elderly people and to examine its characteristic and usefulness.Facility staffs conducted care(aroma massage etc) taking into consideration the individuality of participants and evaluated using DEOS at the beginning of the intervention, one month, and two months later.The DEOS score increased as facility staffs provided a role that took advantage of their preferences and strengths.The interventions that made use of the personality of participants led to social exchange, expression of smiles, and well-being.

研究分野：看護学

キーワード：認知症　高齢者　Well-Being　おだやか　尺度

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

高齢者人口の増加とともに認知症高齢者は年々増加している。認知症高齢者は、2020 年には約 292 万人に達し、85 歳以上では４人に１人が認知症と予測されていたが、2012 年の厚生労働省の推計では要介護認定を受けた認知症高齢者がすでに 300 万人を突破し、2002 年の 149 万人から 10 年間で２倍に増えたことが明らかになった。認知症がわが国の社会問題として意識されたのは 1970 年代であり、その当時は治療やケアの方法さえも不明であった。1990 年後半以降、認知症関わる医療は飛躍的に発展し、認知症に苦しむ人々が自分たちでその体験を語りはじめ、国や地域では、認知症高齢者の尊厳を維持できるような取り組みが行われてきている。このような流れから、現在の認知症ケアの方向性は、可能性、人間性指向のケアが主流であり、その人らしさを大切にするケアが求められている。

認知症の状態を評価する尺度については、認知機能検査、認知症の重症度評価表、精神機能全般の評価、行動障害の評価、ADL の評価など様々との報告があり、特に行動心理面ではネガティブな側面を評価するものも多い。また、認知症に関わらず一般的に、ポジティブな状態を把握するものとしては、QOL 評価尺度などがよく用いられている。ただ、認知症高齢者の QOL 評価尺度では、客観的機能評価としては、ADL の評価や知的機能の評価は行われているが、QOL そのものの評価法はもちろん、構成要素や定義もいまだ定まっておらず、看護の効果として捉えられるが広く活用されてはいない。Brod ら（1999）は、認知症高齢者の主観的 QOL を量的に測定する面接形式の尺度を開発したが、質問に正確に回答できる認知症高齢者のみが対象で、認知症がある程度進行してしまうと調査ができない。本研究に類似するスケールとして認知症高齢者の生活の質尺度（Alzheimer's Disease health related quality of life ： AD-HRQL）の日本語版が開発されている。これは、健康に関連する QOL スケールであり、包括的、かつ認知症の肯定的な面を評価し、看護介入の効果を評価するものである。認知症高齢者の QOL については、なにができないではなく、むしろ、なにができるかという見方が重要であり、患者中心とした QOL という立場に立って考えると、常に患者の主観的評価を尊重するべきであるが、認知症高齢者本人が QOL を評価するには限界がある。認知症高齢者は記憶障害,認知障害がその中核症状にあることから、その家族やケア提供者などの他者による QOL 評価が主流である。

筆者らは、日常生活や臨床の経験から、認知症になっても、おだやかに、その人らしい生活を過ごす人や状態があることに注目して、他者からみて良い状態を表す「おだやか」をキーワードとしたスケール開発した。「おだやか」とは、心が落ち着いて安らかであり、人柄が荒々しくなく、物腰が丁寧なさまであり、本人の心の安定と同時に、周囲との良い人間関係を保つことができると考えられ、認知症を抱える人自身だけでなくケア提供者や家族などの周囲の人にとっても良い状態であると言える。

２．研究の目的

筆者らが開発した 18 項目版認知症高齢者おだやかスケール（Dementia elderly ODAYAKA Scale: DEOS、以下 DEOS）（資料１）の特徴と使用可能性を検討することである。

３．研究の方法

DEOS 調査用紙を用いてプレテストの施行後、高齢者ケア施設（グループホーム、デイサービス）と在宅（訪問看護、訪問リハビリテーション）において本調査を実施した。対象者に対してアロママッサージなどのケア介入や本人の強みを生かした役割や作業を提供して、2 か月後までの変化を DEOS で評価した。DEOS 調査用紙は「当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」の４件法で調査する。また、対象者と評価者の属性を調査するための基本情報シートを使用する。基本情報シートの質問項目は、対象者では、年齢，性別，診断名,要介護度，認知症高齢者自立度，Clinical Dementia Rating(CDR)、評価者である看護師（介護士）では、性別，認知症に関わる看護の経験年数とする。

４．研究成果

対象者は 14 名であったが、体調不良での入院などにより施設利用を中断した方等を除く 11 名の結果を示す（表１）。施設スタッフが利用開始からの状態変化やケア介入前後の効果をアセスメントしたが、対象者の病状や状態が変化していくため、ケア介入の効果として評価していくのは難しいことが明らかとなった。アロママッサージの介入においては効果のばらつきがあったが、対象者本人の好みや強みを生かした役割を提供することに関しては、DEOS の得点上昇を確認した。具体的には、施設では思い通りにならなかった場合に大きな声を出す対象者に対しては、昔の仕事であった地域のリーダー的役割を施設で発揮してもらうことで、それも落ち着き、周囲とのコミュニケーションが良好に、活発になっていった。また、施設スタッフからは、対象者の観察の視点を明らかにすることや状況を詳細に把握することに役立つとの意見を頂いた。本調査を通して、評価者からの質的な状況も含めて評価することで対象者のより詳細

な状態を捉え、今後のケアに結び付けることに繋がることがわかった。今後さらに調査結果を分析して、臨床でさらに具体的に活用できるような示唆を与えていきたい。

（資料１） 18 項目版 DEOS の質問項目

1. 周囲の人と交流がはかれる
2. 人の話を落ち着いて聞ける
3. 気のあう人と一緒に過ごせる
4. 人のことを気遣える
5. 小さな子供やペットを愛しめる
6. 他者に優しくできる
7. ユーモアを楽しめる
8. 昔話を楽しめる
9. 自分のペースで日課を過ごせる
10. 感情（喜びと苦しみなど）を表現できる
11. 好きなおしゃれ(化粧,髪型,服装,持ち物）ができる
12. 自分の意思や願いを主張できる
13. 人間としての誇りを持っている
14. 笑顔で喜びを示せる
15. 他人のために何かができる
16. 悲観的でなく前向きに過ごせる
17. ゆっくりくつろげる
18. 好きなことに打ち込める

※各項目について「当てはまる(4 点)」から「当てはまらない(1 点)」の４件法で調査

（表１）対象者の概要と介入による DEOS 得点変化

ID	施設	診断	性別	年齢	介護度	CDR	開始時	1M 後	2M 後	介入方法
1	DS, 訪リ	DLB	F	91	3	1	63	65.5	64	通常の訪問リハビリ
2	DS	AD	F	90	1	2	51	57	59	アロママッサージ
3	訪看	AD	F	85	1	0.5	64	64	66	作業療法
4	DS	FTLD	M	68	1	1	39	35	―	外出を促す
5	訪看	VaD	F	77	4	2	52	54	55	アロママッサージ
6	DS	AD	F	81	2	2	61	62	63	整容、化粧、顔マッサージ
7	DS	AD	F	82	1	2	48	50	50	動画を使って好きな歌を歌うように促す
8	DS	DLB	M	77	3	1	49	50	52	職員以外とのコミュニケーションを促す
9	DS	AD	M	78	1	1	52	57	59	以前の役割であったリーダーシップ能力を活かすアプローチ
10	訪リ	AD	F	82	1	0.5	68	69	68	通常の訪問リハビリ
11	GH	AD	F	86	3	2	52	49	49	アロママッサージ

施設：DS（デイサービス） 訪リ（訪問リハビリテーション） 訪看（訪問看護） GH（グループホーム）
診断：DLB（レビー小体型認知症）AD（アルツハイマー型認知症）FTLD（前頭側頭型認知症）
VaD（脳血管性認知症）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　3 件）

１． Evaluation before and after Care Intervention for the Elderly with Dementia－Application of 18-Item DEOS (Dementia Elderly Odayaka Scale) in Japan－, Hiromi Tujimura, Makoto Osawa, Setsuko Makita, Kiyomi Yamazaki, Akemi Hashimoto, Risa Matsumura, Shinichi Ito, Takayoshi Sato, Azumi Yoshizawa, Kazumasa Suzuki, Shizuko Niina,Eriko Matsumura, Takashi Shimada , Hajime Kanai, 33rd International Conference of Alzheimer's Disease International, 2018/7/27-28. Chicago, USA

２．認知症高齢者へのアロママッサージ実施前後の心理社会的変化　B 氏に対する「おだやかスケール（18 項目 DEOS）」の評価，辻村弘美、蒔田節子、松村恵里子、鈴木和雅、大澤誠，日本老年看護学会第 23 回学術集会，2018 年 6 月 23 日，久留米

３． Examination of the Usefulness of　ODAYAKA (Well-Being) Scale for Dementia Elderly People (DEOS) Living at Home in Japan　— Comparing the Evaluation of Families and Nurses — , Hiromi Tujimura, 32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, 2017/4/28-29, Kyoto Japan

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：大澤誠、蒔田節子
ローマ字氏名：Makoto Osawa, Setsuko Makita

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。